

## 審査の結果の要旨

氏名 張 暮輝 (ジャン ムーフィ)

“Proceeding in Hardship: The Process of Institution-Building and the Evolution of China-Japan-South Korea Trilateralism” (困難の中を進む：日中韓三国協力の制度化建設) と題される張暮輝氏執筆の本論文は、東アジアの国際関係において従来注目されることが少なかった日中韓三国協力の制度化が、なぜ進展したのか、しかしながら三国協力が脆弱であるのはなぜか、そして日中韓それぞれが三国協力をどのように認識してきたのかという問いに対し、政府間主義 (inter-governmentalism) の理論に基づき、実証主義的な考察を加えることで解答を与え、重要な知見を数多く生み出した論文である。

本論文の優れた点は、まず、三国間主義 (trilateralism) に関する理論的貢献である。多国間主義 (multilateralism) は、二国間主義 (bilateralism) とは異なり、英国の欧州連合 (EU) 脱退等を見ても分かるように、たとえ1カ国が離脱しても機能しうる。しかし、三国間主義は、たとえ1カ国でも離脱すれば破綻する。このため、三国間主義は、少数国間主義 (minilateralism) の中でも、全メンバーが枠組みを破棄する拒否権を持つという特徴を持ち、多国間主義としての特徴が弱い。

では、日中韓のように、国家のパワーに懸隔があり、しかも二国間で関係悪化を繰り返すような三国間で、なぜ制度化が進展したのか。この問いに対して、著者は、三国間主義が、二国間主義よりも効率 (efficiency) の面において、多国間主義よりも相互利益を確保しやすいという効果 (effectiveness) の面において、ともに優れていると主張する。アジア金融危機をきっかけとして、効率よく効果的な制度化が進んだのは、このためであるという。

ただし、日中韓三国協力の制度化は、経常的な共通利益認識に基づいて進展したというよりも、むしろ危機駆動型 (crisis-driven) であった。危機が去り、二国間関係の悪化が繰り返されることにより、三国協力の進展は大きく阻害された。それは三国間主義は、二国間主義に比べて明確な利益を獲得するコストが高く、また多国間主義に比べて離脱コストが低いからである。このように、本論文は、三国協力の制度化とその停滞の原因を、理論的に説明することに成功している。

本論文における、次に優れた点は、主要なアクターである韓国、日本、中国

それぞれの、三国協力に対する認識および政策の違いを明らかにしたことである。韓国は、ミドルパワー外交の一環として三国協力を重視し続け、二国間関係が悪化しても三国協力をボイコットしたことがない。その一方で日本は、二国間関係悪化の際に関係改善のきっかけを作る時に利用する以外には三国協力を消極的である。さらに中国にいたっては三国間主義を二国間主義の延長線にとらえる傾向が強く、二国間関係が悪化すれば（多国間協力をボイコットしないのに）二国間のみならず三国協力をもボイコットする。これらの知見は、三カ国語を駆使した丹念な文献読解と聞き取り調査を通じて実証的に明らかにされたもので、これまで比類すべき研究成果は存在しなかったと言ってよい。

このように、本論文は、日中韓三国協力の制度化過程を分析することを通じて、理論的貢献と実証的知見の提示という 2 つの点で、大きな学問的貢献を行った。理論的考察を行っている部分の論述が、異なる理論的立場の間でどっちつかずの観があることや、一部の用語の定義に厳密さを欠いていたことなど、なお論文としては改善しうる部分も存在しているが、これらの点は、本論文の学問的価値を大きく損ねるものではない。

よって本論文は博士（学際情報学）の学位請求論文として合格と認められる。